咸豊初年に『夷氛聞記』と『海国四説』を読む

――南京条約後、澳門から省城への「西人」の移動が意味すること――

村尾　進

【要約】一九世紀前半の広州地域社会における有力な指導者梁廷枏は、著名な魏源の『夷艘征撫記』と『海国図志』に対する批判を念頭に、『夷氛聞記』と『海国四説』という二つの著作を、広州入城闘争「勝利」後の咸豊初年に刊行した。『夷氛聞記』は、アヘン戦争の本質が清朝政府によって省城広州と澳門（マカオ）の間にしつらえられた「間（ま）」の消滅、すなわち澳門（マカオ）から省城広州への外国人の空間的移動の問題にほかならないことを主張していた。一方、『海国四説』は、この「間（ま）」が消滅したときに生ずる、紳士層・天子相互にとっての死活問題を、紳士層の側から論じていた。梁廷枏の視点は、アヘン戦争とそれに続くアロー戦争が、澳門（マカオ）から省城広州（入城）、省城広州から北京城（駐京）、天子の身体（覲見）へと迫っていく外国人の空間的移動と、それにともなう天子のアイデンティティの危機、すなわち「互市」による「朝貢」の侵犯という、同質かつ連続したプロセスにほかならなかったことを示唆している。

史林　九七巻一号　二〇一四年一月

はじめに

一九世紀後半の東アジアにおいて、魏源の『聖武記』『海国図志』の刊本の多さは際立っている。前者が今日の清朝通史の骨組みを作り、その一部である『道光洋艘征撫記』が、『（道光）籌辦夷務始末』とともに、アヘン戦争に対する我々の視角を規定してきたのに対し、後者はフラットな世界観と「夷の長技を師とし以て夷を制す」という著名な一句によっ

て、現在の我々が疑ってもみようとしない視角をいち早く提供している。

同時代の広州学海堂の知識人たちは、魏源を強く意識していた。『海国図志』五〇巻本を魏源から贈られた旧友張維屏は、[1]後に「黙深（魏源の字）は学問が広くかつ深く、才気煥発、人柄は傲岸で、目中に人無きが如くである。未刊の著作がはなはだ多く、すでに刊行された『聖武記』『海国図志』『皇朝経世文編』などは、みな国中でもてはやされている。その詩文は光彩陸離、紙上の字句はみな意気軒昂、まことに一代の奇才である。」と述べ、[2]張維屏とともに学海堂の学長を勤めた陳澧はアヘン戦争後、「夷を以て夷を攻む」という魏源の主張と、戦争の勃発はアヘン強制徴出のせいではないという断定に対し、伝聞を恃んで兵事を軽々しく論じてはならない、と厳しく批判している。[3]

魏源の『聖武記』と『海国図志』を最も意識し巧妙に反駁したのは、陳澧と同じ年に学長に就任した梁廷枏であった。その『海国四説』、とりわけ「蘭崙偶説」は、『海国図志』中の「四洲志」部分をほとんど全面的に援用しつつ、一方で『海国図志』中の事実関係の矛盾を指摘しその雑駁さを印象づける、という手の込んだ仕掛けを凝らしている。[4]また『海国四説』『夷氛聞記』という書名そのものが、これらを手に取った同時代の読者がただちに魏源の『海国図志』と『夷艘征撫記』（『道光洋艘征撫記』の原題。抄本として広く流通していた。[5]）を想起することをねらったものである。書名としてよく使われる「記聞（聞くを記す）」（たとえば『遺史記聞』など）の二文字を、明らかに不自然な「聞記（記すを聞く）」に転倒させているのは、最初と最後の一文字を共通させることで、『夷艘征撫記』との対応を確実に印象付けるためであろう。[6]さらに「無名氏」の抄本として流布した『夷艘征撫記』にならって、『夷氛聞記』も著者名・刊行年などの情報をすべてそぎ落とし、刊本でありながら抄本のような体裁に近づけ、[7]また『夷艘征撫記』上下巻それぞれの末尾が「論に曰く」で結ばれているのに合わせて、[8]『夷氛聞記』巻末にも同じく「論に曰く」を配置する、という念の入れようである。

梁廷枏の『夷氛聞記』と『海国四説』は、刊行年においてわずかに先立つ魏源の著作を意識、批判している――従来、この瞭然たる事実さえ見逃され、前者は『道光洋艘征撫記』とはやや趣を異にしたアヘン戦争一次史料として、また後者

は『海国図志』と性質を同じくする次善の著作としてしか評価されてこなかった。さらに、おそらく広州入城闘争「勝利」後の咸豊初年（一八五〇年代初期）に同時に刊行されたと思われる『夷氛聞記』『海国四説』の両書（『海国四説』は重刊）[9]が、緊密に呼応し完結した主張――アヘン戦争の本質はアヘンの問題にはなく、外国人（「西人」）の移動にともなう省城広州・澳門（マカオ）間の「間（ま）」の消滅の問題である――を行なっているということも見過ごされている。乾隆二四（一七五九）年から道光二二（一八四二）年の南京条約までの間、朝貢（シャム）・外国貿易（ヨーロッパ各国の東インド会社船・アメリカ商船・インドからの地方貿易船）・キリスト教という三つの対外的要素を有機的に配置した、省城広州と澳門（マカオ）を双焦点とする離散的な空間が維持されていた。宣教師と外国商人を澳門（マカオ）に排除することで、漢人知識人たちは自己の儒教的アイデンティティー（宣教師たちは祖先祭祀を攻撃していた）と自己認識・世界観を確保することができ、他方、天子の方も、省城に唯一残されたシャム使節の朝貢儀礼[10]によって、徳の「光（広）被」という天子に不可欠な自己のアイデンティティーを、漢人の知識人たちに確認させることができた（満人である清朝の天子たちは、とりわけこれを強調する必要があった[11]）。省城と澳門（マカオ）の間の距離は、漢人知識人と天子の間の互恵的な「取引」として、省城広州の側からしつらえられた「間（ま）」にほかならなかったのである[12]。

この論文の目的は、『夷氛聞記』『海国四説』両書を隅々まで丁寧に読み解くことで、広州入城闘争「勝利」後、咸豊初年における梁廷枏の述作の意図と、同時代の読者に向けたメッセージを闡明し、それが続くアロー戦争（第二次アヘン戦争）時期中国の政治過程を眺望し、二つの「アヘン戦争」の連続性を見出す手がかりとなることを示すところにある。

① 張維屏『花地集』巻三「魏默深進士源来書、以所著海国図志見寄、賦此奉答、即題巻端」。
② 張維屏『談芸録』巻上「魏源」。
③ 陳澧『東塾集』巻二「書海国図志後呈張南山先生」。
④ 村尾進「梁廷枏と『海国四説』――魏源と『海国図志』を意識しながら」（『中国――社会と文化』第二号 一九八七年）一六七～一六八頁。
⑤ 夏剣欽・熊焰『魏源研究著作述要』（湖南大学出版社 二〇〇九年）八四～九一頁。梁廷枏は『夷艘征撫記』を読み、それが魏源の著作であることに気がついていた。『夷氛聞記』（中華書局 一九八五年）一

一三頁。

⑥ このことは福岡万里子氏に指摘された。なお『夷氛聞記』の抄本を入手した孟森は、「聞記」の二文字を、抄写の過程で生じた意味を成さない転倒だと考え、書名を『夷氛記聞』に変更して排印・刊行した。『夷氛記聞』（国立北平研究院史学研究会歴史組 一九三七年）孟森「夷氛記聞」跋。

⑦ 『夷氛聞記』五巻の刊本は、中国国家図書館蔵本を影印したものが、『続修四庫全書』四四五・史部・雑史類（上海古籍出版社 一九九五年）に収められている。ただし国家図書館蔵本（五冊）に本来備わっている各巻の封面（「夷氛聞記巻〇」とのみ題署されている）がカットされている。

⑧ 抄本『夷艘征撫記』は、『夷艘入寇記』『夷艘寇海記』『夷舶寇海記』『英夷入寇記』『英人入寇記』などのタイトルでも流通していた。前掲『魏源研究著作述要』八四頁。たとえば『夷艘入寇記』の体裁・内容は、前掲『続修四庫全書』四四五収録の影印で確認することができる。

⑨ 『夷氛聞記』『海国四説』両書の刊行時期、および『海国四説』道光・咸豊両刊本の差異については、前掲『夷氛聞記』「校注夷氛聞記序」二頁・註①、および『海国四説』（中華書局 一九九三年）「前言」四頁を参照。

⑩ 省城広州におけるシャムの使節の朝貢儀礼については、村尾進「懐遠驛」（『中国文化研究』第一六号 一九九九年）」参照。

⑪ 『大義覚迷録』――漢人の知識人に対して、経書そのものの典拠と論理に即し、問題を天命を享けた天子の徳の大小に収斂することによって「華夷の辨」を否定することをねらったマニフェスト――は、清朝の天子の徳が「光被」した結果、「中外一統」が実現すれば、「華夷中外」を分けること自体が無意味となる、と幾度も強調している。村尾進「乾隆己卯――都市広州と澳門がつくる辺疆――」（『東洋史研究』第六五巻第四号 二〇〇七年）六四頁、七一頁～七二頁・注㉑参照。

⑫ この「間」の形成と危機については、以下を参照。前掲村尾進「乾隆己卯――都市広州と澳門がつくる辺疆――」、同「「特に一所を設けて」――碣石鎮総兵陳昂の奏摺と長崎・広州――」（『中国文化研究』第二九号 二〇一三年）、同「港市を離散化する――懐遠駅・十三行・澳門――」（『中国文化研究』第二五号 二〇〇九年）、同「広州と澳門の「間」」（『アジア史学論集』第三号 二〇一〇年）。

一、『夷氛聞記』を読む

(a) 巻一

刊本『夷氛聞記』を手にした読者は、まず第一冊封面に記された「夷氛聞記巻一」の文字と、著者名・刊行年など一切の情報が記されていない体裁に、魏源の抄本『夷艘征撫記』を想起する。続いて『夷艘征撫記』の本文が黄爵滋のアヘン

上奏（「敬籌国計、厳防漏巵」）から始まるのに対し、『夷氛聞記』巻首が「イギリス人は狡猾にも、かねてより内地をねらっていた（「英夷狡焉思逞志於内地久也」）」の一文で始まり、その後ポルトガル人の澳門居留地獲得の記事が続くことに、顕著な相異を印象付けられる。

『夷艘征撫記』① 上巻は黄爵滋の上奏に続き、林則徐の広東派遣とアヘン焼毀、開戦とイギリス軍の北上、琦善の広東派遣と林則徐の革職、川鼻仮協定、戦闘再開とイギリス軍の広州攻撃、琦善の失脚と広東協定、三元里事件と続き、最後に「論に曰く」として、「西洋の長技をことごとく中国の長技とすること」「夷を以って夷を攻める」ことが主張されていた。下巻は再北上しての廈門・定海・寧波・乍浦占領の記述に始まり、長江遡航、南京条約締結の経緯が述べられ、巻末「論に曰く」で「外夷を以って外夷を攻めること」「ことごとく外夷の羽翼（ちから）を収めて中国の羽翼（ちから）とすること」が重ねて主張されている。同書は、現在の我々がアヘン戦争のプロセスを記述する際の常套を作っているといってよい。

『夷氛聞記』はこれに対し、巻一冒頭のポルトガル人の澳門居留地獲得の記事に続いて、澳門のポルトガル人を羨望したイギリスの広州貿易開始、一七五九年の「洪任輝」（ジェームズ・フリント J. Flint）事件を契機とした、来航外国貿易の広州一港集中と外国商人の澳門「住冬」（貿易シーズン以外の澳門仮寓）、澳門のポルトガル人の内地安住を羨望するイギリス商人がこの「住冬」を耐え難く思っていたことなどが述べられる。続いて、マカートニー（George Macartney）使節団（一七九三年）・イギリス東インド会社「大班」による「貢表」上呈のみの「入貢」（一八〇五年）・アマースト（William Pit Amherst）使節団（一八一六年）、およびイギリスによる二度の澳門占領事件（一八〇二年・一八〇八年）に言及し、イギリスは朝貢すること三度に及ぶも、居留地獲得の望みはかなえられず（マカートニーは北京における使節常駐などとともに、広州省城に近接する一小地を居留地として要求していた）、また澳門の占領をねらっても果たせなかった、加えて公行商人の行用銀（公所銀）増額および道光年間のファクトリー前「馬頭」建設失敗に対する憤懣などもあったが、アヘン貿易の利益は計り知れず、また関税は国家財政に資するところが大きいため、貿易が中断すればその利益が失われ国が成り立たず、また

これまで中国の懐柔を受け、乗ずる隙や口実もないなどの理由から、我慢に我慢を重ね、あえて居留地獲得のためにただちに事を起こそうとはしなかった、と述べられる。[2] インド植民地のアヘン栽培、中国への売り込み、蘆船、アヘン密売船の北上、広州におけるアヘン取引の状況など、アヘンをめぐるトピックスが導入されるのは、ようやくこの後からである。魏源の『夷艘征撫記』を念頭に置きつつ、戦争の真因はアヘンではなく居留地獲得というイギリスの欲望にある、と梁廷枏は主張しているのである。このことは、冒頭巻一のここまでの部分と、イギリス人の広州入城に抵抗する省城紳民の動向を詳細に記述する最終巻巻五を対照させることで、いっそう明瞭に確認することができる。

(b) 巻　五

行論の都合上、本論文の中心的トピックである広州入城問題の基本的事実を紹介しておくのが便宜であること、また省城紳士・地方大官の動向をめぐる梁廷枏の筆致が、「事あるときは、まず彼らを集めて公議させ、その後に官が決定した」とする『海国四説』「合省国説」中の「衿耆」の記述を念頭に置いていることを後に確認するためにも、やや長きに及ぶが、『夷氛聞記』巻五のさわりを以下に掲げる。

南京条約の後、広州における貿易が再開したが、イギリス商人はますます驕慢となった、という一文から巻五は始まる。旧制では、東インド会社の「大班」さえも、輿に乗ってファクトリーに入ることはできなかった。南京条約後、商人たちは輿に乗って大通りを漫遊し、内地の中国人との交易でも揉め事が頻発した。彼らはまず省城住民の怒りを買い、やがて職人・商人として省城に来ている、付近の郷村の住民たちも大きな恨みを抱くようになった。道光二一（一八四一）年一〇月六日、ファクトリーから遣わされた下役の代金支払拒否をめぐって、中国人店主・観衆との間にいざこざが起き、イギリス人が発砲、負傷者が出た報復として、ファクトリーが焼き討ちに遭ったのには、このような背景があった。[3]

開港場の一つ福州では、外国船が到着すると、商品を携えて省城に入り、対等の礼を以って中国の地方官に謁見した。

烏石山の積翠寺を宿舎とし、「牙旗」「鼓角」を設置、いつも深夜に騎馬の従者をしたがえて入城するので、民衆は大いに驚き騒いだが、地方官はどうすることもできなかった。上海では、道台の呉健彰が広州ファクトリーの買弁出身であるため、外国人たちは軽く見て、なれなれしい態度で接していた。会えば輩行で名を呼び、会見は朝夕を分かたず、という有様であった。興舁きは中国帽を被り、他から際立たせるために、その帽子の頭紐は五色の糸を縒り合わせたものを使っていた。このようないでたちで城門を出入りしても、紳士・民衆ともにあえて物申そうという者はいなかったのである。④

イギリス人からすれば、すでに和約を結び、かつ対等の関係になったのだから、街（城）の内外を問わず、当地の中国人のように自由に行き来することが許される、と考えたのである。しかし、朝貢の諸国は「験貢」の時でなければ、入城することができない。イギリスは朝貢国とはなったけれども、二度の朝貢はいずれも天津から入ったので、福州・上海の紳民は参考にすべき例が全くなかった。広州の住民のみが、シャムと越南の使節が必ず貢物とともに入城し、「筵宴」の時は冠服に換えて出てくるのを見慣れていたので、イギリス人がこれなくして入城しようとしているのを見て、「中外の大防」はここにかかっていると考えたのである。⑤

道光二三（一八四三）年六月、イギリス人の入城・「燕会」を許すという耆英らのプランを耳にした省城の紳士何有書が紳士たちを集め、巷では外国人が入城し地方大官に謁見しようとしていると聞き輿論が沸騰している、旧来のやり方にしたがってほしいと請願した文書を作成し、耆英に上呈した。耆英は民情を理由に入城の不可をイギリス側に伝えるも、イギリス側の要求は止まず、請願・拒否が繰り返され、そのまま数年が過ぎた。⑥

道光二七（一八四七）年二月、広州入城を宿願とする香港総督デービス（John Francis Davis）が、香港の「緑衣防兵」三〇〇人を率いてひそかに虎門から侵入、珠江を遡り、ファクトリー近辺の安瀾橋付近に居座った。デービスは新豆欄道をつぶしてファクトリーを拡張することを要求し、その要求がかなえられると、続いて建物を立てるために河南の借地を請願し、河南の衆議が沸騰し強行すべくもないことを悟った後は、花地の石囲塘の借地を新たに要求、しかしここでも住民

の反対に遭い、借地の計画は失敗に終わった。もともとイギリス側は広州入城の約束を取り付けるのが本来の目的で、借地の要求はそのきっかけを作るためにすぎなかったため、デービスは入城の期日が決まらないと駐留部隊を撤退させないと耆英を恫喝し、耆英は結局二年後に広州入城を許すことを約定した。⑦

道光二九（一八四九）年二月、それぞれ欽差大臣・署理両広総督、署理広東巡撫に任命されたばかりの徐広縉と葉名琛に対し、香港総督ボナム（Samuel George Bonham）が入城実行を要求した照会を送ってきた。「中外の大防」はこの一挙にかかり、これを斥けなければ広州は福州・上海と同じになってしまうと考えた徐広縉と葉名琛は、民の意向に沿い、官民が心を合わせて入城を拒否する決意を固めた。徐広縉はまず虎門以内の防備を固め、兵士を精選、ついで省城に近い社学の紳士を招いて、盗賊捕獲に名を借り、それぞれ社学に戻って武器・丁勇を揃え、召集に備えるよう指示した。⑧ボナムは虎門水軍の閲兵に来た徐広縉をイギリス船に招待し、船室に閉じ込めて入城の実施期日の提示を迫ったが、徐広縉は天子の裁決の詔諭を待てとつっぱね、無事に省城に帰還した（その後、「民の心はすなわち天子の心である。」という上諭が下された）。一方、これに先立つ二八年一〇月から二九年三月にかけて、粤秀書院の監院は公函を印刷して、越華・羊城両書院の監院、省城在籍の紳士許祥光ら、そして省城内外から河南に及ぶ居民・商人を招集し、街約ごとに規程を頒布していた。また、各家に丁勇を出し武器を揃えるよう勧告し、イギリスの入城を拒むべく準備を行なった。あらかじめ監院・紳士たちが、手分けして各街約を訪問し、うまく段取りをつけていたため、あっという間に老城から新城、新城から郊外へと組織化が拡大し、河南の住民も隆平社学を創設して、これに呼応した。大きな街約の丁勇は数千人に至り、小さいところでも数百人はいた。街約ごとに日を決めて、丁勇の数を粤秀書院に報告し、その晩に地方官・紳士を公所に集め、リーダーたちが丁勇を引率し、提灯と武器を携え、隊ごとに示威行進を行なった。翌日には報奨として、衙門から肉・水・酒が供与された。示威行進は、城内から城外、そして河南の順で行なわれ、一〇日間で一〇万人余りの丁勇を集めた。夜の示威行進の一〇週間、白日のごとく広州城全体に明かりが赤々と点り、武器の音は一〇里先まで響いた。近く西関のファクトリー界

隈では屋上に登って、遠く河南からは望遠鏡を使って、この示威行進を眺めた外国人たちは言葉を失った。ファクトリーは日が暮れる前に戸締りをし、貿易は暫時停止した。イギリス側がなお利害をわきまえず、にわかに人を集めて事を起こすことを恐れた広州の紳士たちは、ボナムに団練組織の旨を伝えるべく、公函を共同で作成し、通事に託してファクトリーの領事まで届けさせた。さらに事の曲折を理解できないことを懸念した七、八人の紳士たちが領事を訪問し、以前と現在では事情を異にしていることをつらつら述べ立てた。入城の要求を中止する、というボナムの文書が省城に届いたのはこの後である。広州入城中止を報告する徐広縉の上奏文を受け取った天子は大いに悦び、総督徐広縉・巡撫葉名琛をはじめとする文武官僚、紳士、書院監院、広州城内外および河南の丁勇を率いた三七三人のリーダーたちに、異例の褒章が賜与された⑨――ここまで述べた後、「論に曰く」の一段が最後に添えられ、『夷氛聞記』巻五の記述は終わる。

(c) 述作の意図

『夷氛聞記』は、巻三の後半および巻四を除き、一貫して広州を記述している。ポルトガル人の澳門を垂涎し、内地居留地の獲得を熱望するイギリスという巻一冒頭部分と、イギリス人の広州入城を阻止しようとする省城紳民の行動を記述する巻五全体は明瞭に呼応し、〔黄爵滋のアヘン上奏から説き起こす魏源の『夷艘征撫記』とは対照的に〕アヘン戦争とは澳門から省城内へと向かう外国人の空間的移動のプロセス、すなわち清朝政府によって広州と澳門の間にしつらえられた「間」の消滅の問題である、と梁廷枏は主張している。巻を追い、イギリス人が澳門から省城に逼近するほどに、省城内外紳士の抵抗の記述は詳細かつ熱を帯び、巻三の三元里事件から巻五入城闘争「勝利」に至るまでの叙述は、紳士たちのリーダーシップが、「公議」にもとづく社学・団錬の形成と「官民同心」による広州中路防備体制構築の一連のプロセスであることを示している。そして、入城闘争の「勝利」を記念して編纂された『己酉同譜録』序文に、「事は「中外の大防」に関わる（「事關中外之大防」）」、「我々の今回の行動は、もとより公を思い、また自衛を期したものであった（「在我

等此舉、念固因公、亦期自衛))」とあり、[10]『夷氛聞記』巻五に「広州の住民のみが、シャムと越南の使節が必ず貢物とともに入城し、「筵宴」の時は冠服に換えて出てくるのを見慣れていたので、イギリス人がこれなくして入城しようとしているのを見て、「中外の大防」はここにかかっていると考えたのである。」と強調されているように、自分たち省城の紳士がイギリス人の入城に抵抗したのは、「朝貢」の空間である省城を「互市」の外国人が侵犯することは、徳の「光被」という天子のアイデンティティを危機にさらすことを意味するからだ、と『夷氛聞記』は主張しているのである。

(d)『海国四説』につなぐ

『夷氛聞記』は、ポルトガル人の澳門居留で始まり広州入城問題で終る本文と、作者である「予(わたし)」の行動・コメントを中心に、省城紳士たちの活動を詳細に記述する双行注、という二つの部分から構成されている。同書を読み進める同時代の読者は、アヘン戦争とは一体何だったのかを感得していくプロセスと同時に、注内に頻出する「予」とはいったい誰なのかを探ることを、作者から期待されているのである。[11]「予」の手がかりは、事柄の進行にしたがって小出しに示されていき、やがて巻五のほとんど最後の一段に至って、本文と注を照らし合わせることで見当がつけられるよう周到に仕組まれている(『夷氛聞記』が梁廷枏の著作であることに言及する同時代の記述は見当たらない。「無名氏」の『夷艘征撫記』をなぞったということ以外に、時忌に触れる記述が含まれているということもあり、[12]梁廷枏自身も他の著作の中で『夷氛聞記』に言及することはない。同時代の読者にとって著者の同定は、「予」に言及する『夷氛聞記』中の記述にまず注目し、それを『海国四説』で再確認するという、以下の手続きによってはじめて可能となる)。[13]

「予」の初出は、巻一の道光一八(一八三八)年、農村部でのアヘン・吸引具提出勧告活動からもどった「予」が、保甲に倣った「五家互結・五隣結保」の法を両広総督鄧廷楨に提議、アヘン取締りが順調に進まないことに悩む鄧廷楨が「予」を総督衙門に招き、取締りを厳命した諭旨を見せて涙を流し、「予」もそれを見て心を動かされる、という場面で

ある。[14] 以後も、広州到着前に仏山に滞在していた祁墳と広州で革職・蟄居中の林則徐との間を往復して省城を守る方法を商議、その後仏山南岸で祁墳・林則徐・鄧廷楨三者の会談に立ち会うなど、[15]「予」は地方大官に重用され、その信頼を得ている人物であった。また、『粤海関志』の編纂を終え、朝廷上呈用の紅本の準備も整い、ついで『広東海防彙覧』の紅本作成にとりかかろうとしているときに、このたびのアヘン取締りが終わるのを待って、関係する記述数巻分を加えてから上呈してはどうか、という林則徐のアドバイスを受け、『広東海防彙覧』の紅本作成を一時ストップしたという記述から、「予」は「広東システム」と中英間の紛争の由来を熟知する『広東海防彙覧』『粤海関志』の編者であったことがわかる。[16] さらに「予」は香山県もしくは順徳県の出身で、城居の経歴が長くないため、省城内の声望には限界があり、かつアヘン戦争時期に喪に服し、澄海県学教官の経歴を有する人物であった。[17]

加えて「予」は、広州三大書院のうちの一つ、粤秀書院の監院として、入城阻止のための省城内外住民の組織化に尽力した、広州地域社会のリーダーの一人でもあった。巻五のほとんど最後に配置された双行注の記述は、この事実を端的に示している。

> 省城の書院は、格からいうと粤秀がトップで、越華が第二、羊城が第三である。これ以前、道員の柏公（柏貴）が、自衛組織を作るよう三書院の監院から住民に勧めさせようとしたが、監院たちは互いの様子をうかがうばかりで、まだ動かなかった。事が危急を告げるに及んで、双門底の商人たちが集団で粤秀書院にやって来て、同書院は全省の人士が集まっているところであるから、まず声を上げてほしいと要求した。おりしも院長の南海県出身の何文綺が郷里で病気療養しており、「正監」（監院のトップ）であった「予」はこれを断ることができなかった。そこでようやく公函数万通を印刷し、監院であった羅家政・譚瑩・仇乾厚・張応秋・丁熙らとともに、まず書院の下役を派遣して各街約に章程を頒布させ、さらに番禺の候選道許祥光・候補同知許礼光・候選郎中金菁茅・候選同知沈光国・香山県の候選員外郎鮑俊らとともに、自ら各街約を訪れたところ、あっという間に共感の輪が広がり、それぞれの街約が

時期を分かって粤秀書院に来て、丁勇の数を報告することとなった。[18]

入城阻止を目的とした紳民の組織化をリードしたのは、「正監」であった「予」を中心とした羅家政・譚瑩・仇乾厚・張応秋・丁熙の監院六名であった。これを記した上掲の双行注の後に、「勝利」を嘉悦して発せられた天子の上諭と、褒賞を受けた地方大官・紳士・書院監院の姓名を列挙した本文が続き、監院については「書院監院教官の梁廷枏・張応秋・丁熙は各々内閣中書の銜を、羅家政には五品の銜を給し、その他については原職を基準としてそれぞれ奨賞する」と記されている。[19]「正監」としてリーダーの役割を果たした、注の中の「予」が当然褒賞のトップに掲げられるはずであること、また本文中に姓名を掲げられた四人中の梁廷枏の姓名が注の中には見えていないことから、「予」が梁廷枏にほかならないことを読者はここにいたって気づくことになるのである。

『夷氛聞記』巻五本文の末段には、「論に曰く」の一段が設けられ、それまで一貫して双行注内にとどまっていた「予」が本文中に越境してくる。[20]梁廷枏がわざわざこの一段を設け、「夷を以って夷を攻む」「夷の長技を師とす」に対する批判を展開した（第二章(a)参照）のは、魏源の『夷艘征撫記』を想起させるためであった（七五頁参照）。この二つのセンテンスを目にした読者は、封面の書名と書物の体裁を目にした時にすでに意識においていたはずのこと――著者は『夷艘征撫記』を念頭に置いている――をここで再確認することになる。読者は続いて、この著名な二句を序文に含む魏源の『海国図志』を想起し、そこからさらに入城闘争「勝利」後の咸豊初年に『夷氛聞記』とともに重刊されたと思われる、梁廷枏（読者は、著者「予」が梁廷枏であることにすでに感づいている）のもう一つの著作、これもまた魏源の著作を意識した名を持つ『海国四説』を想起するだろう。そして続いて、実際に手に取った『海国四説』咸豊刊本の各「説」序文の中に、「欽加内閣中書銜広東澄海県訓導梁廷枏」の款識と、『広東海防彙覧』『粤海関志』編纂の後、喪に服している間に同書が著されたという事実を確認し、[21]最後に四つの「説」から構成された同書が、実は『夷氛聞記』で述べられた、広州と澳門の

「間」の消滅が意味するところを説いたものにほかならない、すなわち『夷氛聞記』と『海国四説』はセットになっている、ということを悟ることになるのである。

① ここでは『夷艘入寇記』『夷艘寇海記』『夷船寇海記』『英夷入寇記』『英人入寇記』などの諸タイトルの抄本も含めて『夷艘征撫記』と総称している。

② 『夷氛聞記』一～五頁。

③ 『夷氛聞記』一三七～一三八頁。

④ 『夷氛聞記』一四五頁。

⑤ 『夷氛聞記』一四五頁：「彼意以既和好、且與平行、則不問城内外、皆可聽其遊處如土著矣、不知職貢諸國、非驗貢不得入、英雖列冠帶、而貢無常期、兩次貢舟、皆由天津、更無故事可援也、惟廣東民習見暹羅・越南必隨貢物乃入、筵宴易冠服而出、英夷無之、以爲中外大防、正弊於此」。「驗貢」と「筵宴」については、前掲村尾進「懐遠驛」参照。

⑥ 『夷氛聞記』一四七～一四九頁。

⑦ 『夷氛聞記』一四九～一五三頁。

⑧ これは三元里事件後の紳士による団練・社学・公所の組織化、および両広総督祁墳の指導と紳士の協力による広州中路の守備体制構築を基礎としたものである。『夷氛聞記』七七～八〇頁。三元里事件から入城闘争の「勝利」までが、「官民同心」の一連のプロセスだと広く認識されていたことは、『夷氛聞記』巻五の姚瑩の書簡（一四〇頁）にうかがうことができる。

⑨ 『夷氛聞記』一五四～一六九頁。

⑩ 『夷氛聞記』一六八頁。

⑪ 『夷氛聞記』の著者同定の作業自体は、『夷氛聞記』中の「予」の事績と後世編纂の伝記史料を照らし合わせることで、孟森がすでに行なっている（前掲孟森「夷氛記聞」跋）。以下において私が行なっているのは、『夷氛聞記』『海国四説』両書だけで著者を確定することが可能であること、そして広州入城闘争「勝利」の情報に触発されて『夷氛聞記』を手に取るであろう同時代の読者を、梁廷枏がどのような手順で『海国四説』に導こうとしているかを示すことである。

⑫ 『夷氛聞記』「校注夷氛聞記序」二頁。

⑬ ただし、「予」が林則徐・鄧廷楨・祁墳などの地方大官と交際があり、『広東海防彙覧』『粤海関志』の編者で、澄海県学教官の経歴を有する人物であったことなどは、梁廷枏の『藤花亭詩集』『藤花亭駢体文集』などからも確認することができる。梁廷枏撰・楊芷華点校『芸文匯編』（暨南大学出版社 二〇〇一年）三〇五～三〇七頁、三一一頁、三二八頁、三四六～三四七頁、三五〇～三五一頁、三五三～三五七頁、三八九～三九五頁、四二九～四三一頁。

⑭ 『夷氛聞記』一六～一七頁。

⑮ 『夷氛聞記』六四～六五頁。

⑯ 『夷氛聞記』三六頁。

⑰ 『夷氛聞記』六〇頁、七八頁、八一頁、八三頁。

⑱ 『夷氛聞記』一五八～一五九頁。

⑲ 『夷氛聞記』一六七頁。

⑳ 『夷氛聞記』一七一頁。

㉑ 『海国四説』「前言」四頁、「海国四説序」三頁、「合省国説序」五一～五二頁。

二、『海国四説』を読む

(a) 魏源を批判する

『海国図志』の序文において、「西洋の人を以て西洋を譚(かた)る」と自著を誇り、「夷の長技を師とし以て夷を制す」ることを主張した魏源を念頭に、梁廷枏は自己認識と世界をめぐる根源的な批判を行なっている。

〔書名を〕「記」ではなく「説」としているのは、中国人が外国のことを述べるときには、おのずから命名のスタイルというものがあるからである。また実際に行ったところではないから、真実か否かを確かめようもない。もとより李思聡の『百夷伝』、侯継高の『日本風土記』を例とすることなどできない。(「海国四説序」)①

今日の中国においては、あらゆる者が外国に勝つ手立てを講求している。〔その方法として唱えられるのは〕「夷を以って夷を攻む」か、「夷の長技を師とす」かのどちらかである。……天朝全盛の時に、彼らの力を借りるにとどまらず、彼らの得意とするところを手本とし、彼らを招いてその学を受けるなどということは、失体これより甚だしきものはない。彼らの「火砲」は〔中国でいえば〕明代初期に始まり、おおむね中国の古い「地雷」「飛砲」をもとに発展させたものである。「夾板舟」も鄭和が図を書いて彼らに与えたものであり、彼らの数学にいう「東来の借根法」も中国から学んだものである。ひたすら実事求是に努め、必勝の備えをしておけば、外国も我々をどうすることもできないのに、かえって外国に勝つ方法を彼ら自身に求めるなど、古今を通じてこのような道理はない。ただ彼らに屈服するだけである。どうして必勝を期することができようか。(『夷氛聞記』巻五「論に曰く」)②

『夷氛聞記』巻五「論に曰く」の「夷の長技を師とす」はもとより、「海国四説序」の「中国人が外国のことを述べると

きには」の一句も、魏源の「西洋の人を以て西洋を譚る」を逆手に取ったものであることはいうまでもない。[3] 魏源は、差異がすみずみまで行き届いた、フラットで鳥瞰的な世界を前提とする『海国図志』を念頭に（『海国図志』の主材料である『四洲志』は、ヒュー・マレー（Hugh Murray）の世界地理書の漢訳であった）、技術（可能性としては、さらに思想・宗教などまで）の他者からの伝達（「西洋の人を以て西洋を譚」らせ、中国人が「夷の長技を師とす」る）ということが可能だという、現在の我々にとっては退屈な観点を述べているにすぎない。だがこれは梁廷枏ら清代の伝統的知識人の自己認識・世界観とは真っ向から対立するものであった。[4] 問題は「失体」云々にあるのではない。「海外諸国の疆域形勢・風土人情をつぶさに掲載している」『海国図志』が提供しているのは、「天から視た彼此の区分の無さ」であり、「人から見た中外の区分」ではなかった。[5] 一方、梁廷枏が前提としているのは、「天から視た彼此の区分の無」い世界の中の一中国ではなく、「人から見た中外の区分」、すなわち絶対的な主体としてまず措提された「私（中国）」と、それに遅れてやってくる、あいまいな「私以外（中国以外）」との非対称性である。「中国（私）」と「中国以外（私以外）」との間には越えがたい閾があり、中国人はどこまでいっても「中国」から逃れることができない、世界の本質は「中国」の中にすでに備わっており、それは「中国」から波及した末に顕現することがある、と梁廷枏は主張しているのである。だから「西洋の人を以て西洋を譚る」のではなく、あくまで「中国人が外国のことを述べる」のであり、「火砲」「夾板舟」「東来の借根法」など「夷の長技」は、もともと中国に備わっていたものが広がったのに相違なく、翻ってこれを己に求めるべきなのであって、それを外国から伝達されることなどはありえないというのである。『海国四説』全編を梁廷枏の著述の意図に沿って読み解くためには、現代の我々の常識とは正反対の、しかしまったく対等の価値を持つ、もう一つの認識の仕方をまず理解しておくことが必要となる。

(b) 「海国四説序」および各「説」序

梁廷枏は、「道光丙午（一八四六）年正月」という日付が入った『海国四説』全体の序文で、各「説」執筆の意図と梗概をあらかじめ説明している。

私は喪に服している機会に、旧聞を探して、四つの論説を作った。まずキリスト教の委曲を詳らかにし、これを聖人の道によって適正化する。あわせてしばしば耳にする彼らの説に考証を加え、その出自を明らかにした上で、キリスト教を仏教と並存せしめる。これが「耶蘇教難入中国説」である。ついで互市諸国の内、商品・関税の額が大きいとされる者を取り上げ、一貫して中国の年号を懸けつつ、その風土の起滅の所以を述べる。〔記述の材料は〕檔案から当今の賢人の著作におよび、〔さらに〕彼ら自身が説くところを交え、荒唐無稽な話はこれを正して始末明瞭ならしめ見聞に資する。以上が「合省国説」と「蘭崙偶説」である。最後の「粤道貢国説」は、広東を貢道とする者の〔朝貢の〕年月・貢物・回賜・筵宴を記し、「厚往薄来」の義を闡明する。……かくして臣と称して貢物を納めるのは、天朝の厚恩・煦育の深さに由来することが瞭然とする。「朝貢」という言葉の意味をよく考えて、事なきに安んじる、――またそれだけにとどまらず、さらに聖学の恩沢に浴し、異域順良の民となるべく励むということになれば、わが清朝の声教はどうして漢・唐両代に及ばないといえようか。〔執筆に際して〕私が考えたことは、以上これだけである。[6]

一連の意図と梗概を述べた後に、わざわざ〔執筆に際して〕私が考えたことは、以上これだけである（區區之懷、如是而已）」と付け加えるのは、いかにも思わせぶりである。四「説」は本当に、まず「耶蘇教難入中国説」があり、ついで互市両国について述べた「合省国説」と「蘭崙偶説」、そして最後に「粤道貢国説」、という構成を意図していたのだろうか。「四」という数字を見た時、中国人の読者が最も安定感を感じるのは、前二「説」・後二「説」という配分ではないのか。[7]

『海国四説』道光刊本の序文および前三「説」の序文には（「粤道貢国説」には序文が附されていない）、それぞれ完成時の

年月日が記されており、作成の順序を確認することができる。「合省国説」（道光二四（一八四四）年八月末日）と「耶蘇教難入中国説」（道光二四年一一月一日）がまず一気に作成された後、しばらく間があり、「蘭崙偶説」が道光二五年五月五日（端午）、「海国四説序」が道光二六年正月、という前後関係となっている。[8]「合省国説」と「蘭崙偶説」は、本来、ひとまとまり、連続したものとして作成されたわけではないのである。「耶蘇教難入中国説」と「蘭崙偶説」の間の間は、この間に魏源の『海国図志』を入手し、その中の『四洲志』を利用できるようになってはじめて「蘭崙偶説」の執筆が可能になった、という事情によるものと思われる（先に掲げた「海国四説序」中の「当今の賢人の著作におよび、〔さらに〕彼ら自身が説くところを交え」の一句は、魏源の『海国図志』および『四洲志』を指している）。「粤道貢国説」は『広東海防彙覧』『粤海関志』を編纂した際に収集した檔冊をそのまま引用・配置したものなので（とりわけ『粤海関志』巻二一「貢舶一」、巻二二「貢舶二」、巻二三「貢舶三」と内容的に類似している。他の三「説」がともに「梁廷枏撰／著」と題署されているのに対して、「粤道貢国説」のみは「臣梁廷枏謹編」となっており、序文がないため完成時の年月日も記されていない）、たいした手間も必要とせず、四「説」の構成を明晰、一貫したものとするために、「蘭崙偶説」に引き続き編集され、最後に配置されたものと思われる。

「蘭崙偶説」咸豊刊本では、序文が不自然に中断され、道光刊本では序文末尾に記されていた年月日と款識（「広東澄海県訓導順徳梁廷枏」）が省かれている。[9]もともと序文・年月日・款識を持たない「粤道貢国説」の巻一「暹羅国一」冒頭の「謹案（謹しんで案ずるに）」（後述するように、本来「粤道貢国説」全体の序文の役割を果たすべき内容のものである。[10]）と同体裁に揃えるという意図があったものと思われる。一方、咸豊刊本「耶蘇教難入中国説」「合省国説」の序文の年月日・款識は、道光刊本そのままに整備されている。[11]『海国四説』咸豊刊本では、序文の体裁において、「耶蘇教難入中国説」と「合省国説」、「蘭崙偶説」と「粤道貢国説」がそれぞれペアにされているのである。

(c) 「蘭崙偶説」と「粤道貢国説」

「粤道貢国説」は、巻一「暹羅国一」（「謹案」「入貢通例」「暹羅国一」）、巻二「暹羅国二」、巻三「荷蘭国」、巻四「西洋諸国」（「意大里亜国」「博爾都噶爾雅国」）、巻五「英吉利国一」（乾隆七年～乾隆六〇年）、巻六「英吉利国二」（嘉慶元年～嘉慶二一年）という構成になっている。巻一「暹羅国一」冒頭の「謹案」の一段は、以下の通りである。

わが朝の威徳はあまねく世界を被い、届かないところはない。まず朝鮮が率先して朝貢し、その後、琉球・越南・日本も相継いで朝貢した。みな属国を称して正朔を奉じ、長きにわたって藩臣に列して、方物・貢期ともに規程通りである。この他、これまで中国に通じたことのなかった西海極僻の国も、みな帰服し、先を争って遠路来朝してきた。貢道は例にならって、海路の遠近に応じて沿海各省に割り当てられ、礼部が管轄する。広東から入貢する者には、シャム・オランダ・イタリア・ポルトガル・イギリスなどの諸国があり、使節の船が至ると大吏が上奏し、天子の俞允の旨をいただく。ねぎらいのパーティーの典礼があり、官が伴送する。回賜の品は多く、貢物は少なく、恩を施すことときわめて手厚い。臣（わたし）は沿海地方に育ち、目にし耳にして体にしみこんでしまったものはとても書ききれるものではないが、過去の書籍に徴してみれば、ちょっとした故実にも、前代（明代）に使者を遣わして〔朝貢を〕招致したのとは比べものにならない、「一統無外の規（げんそく）」と「聖徳懐柔の遠」をうかがうことができるのである。世々、天子の仁に浴し、ために感激・歓喜する者も、〔いっそうの喜びを表すために〕どのように鼓舞するかはきっと知らぬであろう。蚩尤や鯨鯢の如き者にも、まだ良心が残っているとするならば、何をわきまえるべきかを静思させてやろう。以上のような次第で、古い典章にまで遡って調べ、貢道を広東に取る諸国について、それぞれ貢期・貢物・褒奨の勅詞・数々の回賜を余すところなく記し、昭代同文の盛んなることを広く知らしめんとするのである。⑫

「海国四説序」中の「かくして臣と称して貢物を納めるのは…」の一文（八六頁）と同趣旨のこの一段が、〔アヘン戦争を発動し、広州入城をねらっている〕イギリスを念頭においていることは、「蚩尤や鯨鯢の如き者にも、まだ良心が残っているとするならば、何をわきまえるべきかを静思させてやろう。」とあることから明らかである。わきまえるべきは、「あまねく世界を被うわが朝の威徳」と〔省城内の朝貢儀礼が表象する〕天子の「一統無外の規（げんそく）」「聖徳懐柔の遠」である。しかし逆にいえば、天子の「一統無外の規（げんそく）」「聖徳懐柔の遠」をわきまえず広州入城を要求するイギリスが、「あまねく世界を被うわが朝の威徳」、すなわち清朝天子の徳の「光被」（これは第二章(a)で述べた、清代中国知識人の認識方法の一表現である）を傷つけることになることを、この一文は暗示している。前三「説」の通例を逸脱して、「説」全体の序文たるべき内容を有したこの一段を、序文として「粤道貢国説」全体の冒頭に掲げず、ことさらに「謹案」として巻一「暹羅国一」の冒頭に配置したのは、天子の徳の「光被」が、朝貢の意を十全に体したシャム以外の西洋諸国、とりわけマカートニー・アマースト両使節を派遣して「妄干（分不相応の要求）」を行なったイギリス[13]（これは「粤道貢国説」巻五「英吉利国一」、巻六「英吉利国二」の主たる内容にほかならない）に対しては不全であることを読者が読み取るよう誘導しているのである。

貿易を国是・生命線として、各地域で軍事紛争を惹起し、アヘン戦争を発動したイギリス（これは「蘭崙偶説」の核心である[14]）によって、世界を「光被」するという天子のアイデンティティーが揺らいでいるということは、「粤道貢国説」の枠内を越え、同「説」と「蘭崙偶説」とを対照して読むことによって、いっそう強く印象付けられることになる。

「蘭崙偶説」巻一は、中国の朝代と対応させつつ、ローマ帝国のカリギュラからビクトリア女王までの歴史をたどり、巻二はイギリス本国の地理と人口、スコットランド・アイルランド・アメリカ・インド・東南アジアの属領などに言及する。巻三は、政治組織の大概（「巴里満 Parliament」「律好司 House of Lords」など、『海国図志』五〇巻本中の『四洲志』をそのまま踏襲した音訳の羅列およびその職掌の簡単な註解）・軍隊・財政・関税について記述した後、「公司（東インド会社）」の設立と発展、「散商（地方貿易商人）」との確執、「散局（東インド会社の中国貿易独占権の廃止）」・中英貿易（「入貢之始末」「兵船節

次内援之始末」）・軍事的紛争（一二世紀のフランスとの抗争から一九世紀の中央アジアをめぐるロシアとの角逐まで）に説き及ぶ。巻四は、『海国図志』五〇巻本（とりわけ巻四九「夷情備採」）に材料の多くを負った部分で、まず国家財政が貿易に依存していることを強調した後、アヘン戦争の経緯を述べ（インド・中国との貿易、アヘン栽培、アヘン密貿易、紋銀の流出、林則徐の繳烟、広州の情報を入手したロンドンの動揺、茶・大黄の騰貴、アヘン戦争、五口開港）、その後一転して首都ロンドン・開墾の奨励・諸河の名称・婚姻・兵制・学制・食事習慣などの日常生活・風俗など、百科事典的知識を披露し、最後に按語が添えられている。

「蘭崙偶説」巻三には、「粤道貢国説」中のマカートニー・アマースト両使節派遣の記事を含んだ、中英貿易における確執・紛争の一連の記述（「入貢之始末」「兵船節次内援之始末」）があり、[15]巻四ではさらにアヘン密貿易からアヘン戦争、五口開港に記述がおよぶ[16]ため、「蘭崙偶説」と「粤道貢国説」をペアにして読む読者は、前者すなわち「互市」がいちじるしく後者、すなわち「朝貢」によって表象されるべき天子の徳の「光被」を傷つけていることを印象付けられるのである。

梁廷枏の意図が「蘭崙偶説」と「粤道貢国説」の対応にあったことは、東洋文庫に収蔵されている彼の別の著作、『広州中路海防輯要』（鈔本・全一六巻）にいっそう明瞭に確認することができる。[17]「広州中路」とは、広東省全体の海防を東路（恵州・潮州）・中路（広州）・西路（肇慶・高州・雷州・廉州・瓊州）という三つのゾーンに分かったうちの、省全体の海防の要の位置にあった中路を指している。同書は、『広東海防匯覧』中の関連部分をほぼそのまま抽出し、末尾に『（道光）広東通志』の一部を加えたダイジェスト版である。記述内容の明示された下限が道光二三（一八四三）年であることから、入城を急ぐイギリスとの軍事的紛争に備えるために緊急に作成されたことがわかる。

『広州中路海防輯要』は、巻一三までは「広州中路」の地理的範囲内にある海防関連のきわめて実用的な記事（「険要」「営制」「砲台」など）を、『広東海防匯覧』から網羅的・機械的に抽出したものといってよいが、巻一四以降の三巻の内容は一転して別のまとまりを成している。巻一四「馭夷」は、本来『広東海防匯覧』「馭夷」（巻三六～巻三八）中に含まれ

ていたシャムなどの朝貢、来航諸国の互市などの多彩な記載をすべて切り捨てた、イギリスの「通貢」（マカートニー・アマースト両使節、および乾隆六〇（一七九五）年の「呈進表貢」）の記事であり、巻一五「事紀」も『広東海防匯覧』「事紀」（巻三九～巻四二）の大部分を占める明以前の事績と清代の海賊の記載などはひとしく顧みず、イギリスによる澳門・省城の騒擾の記述だけを抜粋したものである。一方、巻一六「雑夷」は、『（道光）広東通志』「外蕃」――道光帝の即位以来、朝貢使節が雲集し、天子の威徳が及ばないところはないということを証明するために、『（雍正）広東通志』の例にならって設けられた[18]――をほとんどそのまま引用したものである。

『広州中路海防輯要』の編纂時期は「蘭崙偶説」のそれに近く、『広州中路海防輯要』巻一四「馭夷」・巻一五「事紀」と「蘭崙偶説」巻三の「入貢之始末」「兵船節次内擾之始末」は、前者が上諭などからの引用をそのまま羅列するという『広東海防匯覧』の体裁そのままに抜粋を行なっているのに対して、後者が梁廷枏自身の手になる叙述として簡潔に要約されているという違いがあるものの、扱うトピックスは同じである。一方、『広州中路海防輯要』第一六巻「雑夷」は、聖朝の声教が遠く及んでいることを証明するという意図を「粤道貢国説」と同じくしている。『海国四説』において「蘭崙偶説」と「粤道貢国説」をペアにするという梁廷枏の意図は、作成時期が近接し、イギリスの広州入城に備える目的で作成された『広州中路海防輯要』一書中における末尾三巻の緊密な対応（巻一四「馭夷」・一五「事紀」と巻一六「雑夷」）としても確認できるのである。

(d) 「耶穌教難入中国説」と「合省国説」

「蘭崙偶説」「粤道貢国説」に比べて、「耶穌教難入中国説」と「合省国説」の二篇は、「説」というにふさわしい内容と完備した序を持っている。「耶穌教難入中国説」はさらに、巻に分かっていないかわりに、小見出しが行間に添えられていること、キリスト教の大意を取り、その説を紹介してから論断を加える（先引後論）という手続き、最後に記述に関

連するエルサレム付近の地図が一枚加えられていることに体裁上の特徴がある。

「耶蘇教難入中国説」の構成と内容は、小見出しを辿ることで確認できる。キリスト教は必ず「周孔の道」の化するところとなることを明らかにするのが目的であることがまず宣言され、キリスト教の起源に遡り（モーゼ・イエス）、聖書に言及した後、その意図は全世界にキリスト教の信仰を広めることにあり、中国布教はその一環であると述べられる。ついでその諸説の引用に入り（先引）、キリスト教の故事（天地創造・アダムとイブ・ノアの箱舟・モーゼの出エジプト・イスラエル王国とユダ王国・イエスの生誕）・イエスの一生における諸蹟と教説・弟子たちの布教などが紹介された後、さらに復活・審判の説と、中国文献にもとづいた「大秦教」「祆教（波斯教）」「末尼（摩尼）教」「回回」とキリスト教の相互関係の記述が加えられる。最後に論断（後論）として、復活・審判の説に対する疑問とキリスト教が中国に入ることができない理由が列挙され、開闢以来六千年間のことを記した史書が存在するという説（『明史』巻三二六「外国七」）が荒唐無稽であると主張される。

キリスト教に対して中国の知識人たちが抱く不安の根源は、「周孔の道」を「揺」らし「奪」って、キリスト教を「移」し「易」えることをねらう布教の決意・熱意にある、と梁廷枏は述べる。[19] それは他者から中国への伝達が自由自在に行なわれることはあり得ないという、絶対的な主体としての「中国」とあいまいな「中国以外」という非対称性（第二章(a)参照）を突き崩すものであり、聖人が「在宥」（余計な干渉を加えることなく、在る者を在るがままに在らしめ、無為にして徳化する）すれば、民衆がただちにそれに応ずる、という中国的な教化・徳化の理念に対する挑戦であった。五口通商の後、宣教師たちの信仰心はますます篤く、それにともない布教の意欲もいや増し、言葉・文字・禍福など、人の気を引くあらゆる手立てを尽くして入信を誘っている。加えて近年、中国書を読むことのできる者が、聖書の要旨を解説し序を付したものを印刷し、省城の商店街に人を派遣して、一軒一軒配布させている。信仰を勧めんとするその思いは、仏教に比していっそう切なるものがあり、切なればこそいっそう激しく、かくて場所・状況・人をわきまえず、あらゆる手立てを講じて

一心に入信を誘うのである。ゆえに彼らはまず言を以って誘い、それがうまくいかなければ利をちらつかせ、それでも効果がなければ最後は威を以って脅迫する、と南京条約後における広州紳士層のアイデンティティーの危機の由来を梁廷枏は説明する。

しかし、中国人から「周孔の道」を奪い去って、キリスト教を移し易えることは絶対にできないのである。仏教が本来、寂滅・清修を宗旨としていたのに対し、キリスト教は祈禱・礼拝を加え、本来の姿とは随分かけ離れたものになってしまっているけれども、つまるところキリスト教がいう天国・地獄は仏教と同じものである。キリスト教の人々は、仏教がすでに中国に入ったからには、津々浦々に浸透し、賢愚・長幼を問わずみな土や木で作った偶像の前で合掌礼拝していると考え、そこで至尊・至大・至顕の天を掲げ、〔仏教と〕互いに引き立てあってその規範を広めようとしたのである。彼らは自身が習いとする毎週の礼拝を見慣れているので、仏教に溺れている中国人も当然このようにしているに違いないと考えたのであろう。しかし、その浅薄さ、荒唐無稽ぶりにおいて仏教・道教と同レベル、あるいはそれ以下のキリスト教に、中国人が惑わされるはずがない。その言葉が浅薄ならば、人の思索に耐えず、庸才といえども異論をさしはさむだろう。ましてや聡明の士においてはいうまでもない。そのやり方が現実離れしていれば、人の疑惑を誘うだけで、平素、仏道を説く者ですら必ずやこれを空文視するであろう。いわんや礼儀の俗においてはいうまでもない。加えて、その教主の種々の奇能異蹟は千年もの後の伝聞にもとづくに過ぎないのだが、それはさておき、たといその個々がでたらめでないとしても中国の道士のまやかし同然のものにすぎない、と梁廷枏は主張する。

一方、「周孔の道」は中国人に深く入り込み、確固として根付いている。唐・虞・三代以来、周公・孔子の道は、天に懸かる日月、地に流れる長江・黄河のごとく、燦然と輝いている。歴代の諸儒はその流れを繁衍し、〔そのうち道について〕深く講究した者たちの事績は書籍に明らかである。およそ政治と儀礼の根本は、みなここに由来している。その皮膚に行きわたり骨髄に浸み込むことは深くかつ久しく、さすればこの道にいささか背く者が日々傍にいたとしても、これを

揺さぶって奪い去り、〔別のものに〕取り代えることなど絶対にできないのである。ましてや道に大きく背いた者に、そんなことができるはずもない、と梁廷枏は断言する。

近年、開港地を広げ、宣教師たちが危険をものともせず、はるばるやって来るようになったが、自らの福を求めるだけならば、民に害を及ぼすことはない。仏教と並存させるのも、また柔遠の義を発揚するものであろう。しかし、そもそも西洋人が中国の書籍を読むことを知ったからには、将来必ずや聡明の人が翻然としてこれまで学んできたものを捨て去り、戦国時代の陳良のように、堯・舜・禹・湯・文・武・周・孔の道に従おうと考えることであろう。現在はまさにキリスト教が「周孔の道」の化するところとなる一大転機なのである。彼らがその教を中外にあまねく広めんとしているのは、将来に証明され、今その兆候を示している勢いが見えていないのである、と梁廷枏は結論する。

「周孔の道」が西方を化するという「耶蘇教難入中国説」の論理（世界の本質は「中国」の中に備わり、それは「中国」から波及する。第二章(a)参照）と全く同じものが、「耶蘇教難入中国説」の次に配置された「合省国説」序文末尾にさっそく現れる。[20] 同「説」執筆の主要な材料となったブリッジマン（Elijah Coleman Bridgman 裨治文・高理文）『美理哥合省国志略』の記述に関する言及である。

ある者は次のようにいう。西洋は中国から遠く離れて、文化・制度も大いに異なる。ところが〔ブリッジマンの『美理哥合省国志略』では〕「省」「府」「州」「県」という語を使い、これは中国のいい方を模倣している。アメリカ合衆国の一三省が順に置かれはじめたのは、同国が入貢し広州での貿易を許されるより前の事であり、中国が前代に「道」を「省」に改めたことを耳にしたはずもない。一体どのようにして模倣したのか、と。〔このある者は〕ここからアメリカ人自身が記した『美理哥合省国志略』の信憑性を危ぶむのである。しかし、「熱爾瑪尼亜国」が「合勒未祭亜」を「省」としていることは『皇朝職貢図』に記載があるし、他にも「細亜州」に「嘉略省」「弗俗府」、「欧羅巴州」に「嘉亜省」、「利未亜洲厄日多国」に「孟斐府」があることは、南懐仁の『坤輿外紀』

に見える。だとすれば「省」「府」「州」「県」という呼称は、アメリカ合衆国から始まったわけではないのである。どうして『美理哥合省国志略』の記述が信じられないことがあろうか。[21]

この一文は、『美理哥合省国志略』の記述に対する「ある者」の懐疑を紹介し、それに対して梁廷枏が答える、という設定になっている。やや舌足らずに見えるが、梁廷枏がいいたいのは、中国から直接というわけではないかもしれないが、『皇朝職貢図』や『坤輿外紀』中に見える諸国を通して、「省」を最上級とする中国の行政区分がアメリカ合衆国に敷衍された、ということである。「合省国説」巻一でも、中国が「省」に分かって統治しているのをアメリカ合衆国が知り、自らの国でも「省」と名づけている、と繰り返し強調している。[22]

梁廷枏が「合省国説」の序文にわざわざこの一段を配したのは、現在の我々ならばアメリカの近代的教育制度と呼んでしまうものを、中国の科挙制度が敷衍したものとして理解するためである。中国から波及した「省」「府」「州」「県」という行政区分の上に、中国の学校試・科挙試のイメージを重ねる（「郷学」「県学」「省学」）。「省学館」の「士子」すなわち「進士」「挙人」および耆老をまとめて「衿耆」と呼ぶ。そしてその「衿耆」たちが、独立を勝ち取り、法（「立国の規条」）を定め、任期のある大統領制度を創設した、と主張したいのである。

アメリカ独立のいきさつが語られる「合省国説」巻二では、ボストン・ティーパーティー事件と課税のくだりまで来たところで、次のように述べられる。

イギリス国王は、〔アメリカの〕民衆が命令に従わないのは、「総制」（国王に任命された各省の「督」「撫」）[23]の責任だと激怒し、前に給した官印をにわかに回収し、任命した官僚組織も解体しようとした。新大陸（「新地」）の旧制として、「省学館」出身者（「士子」には「進士」「挙人」の二種類があり、ともに「衿」という。この語については、後に詳しい）および耆老を、中国の故事にし

たがって「衿耆」と称した。事あるときは、まず彼らを集めて公議させ、その後に官が決定した。乾隆三九年（西暦一七七四年）、諸省は「衿耆」をすべてフィラデルフィアに集め、戦争回避の方策を合議した。[24]

イギリス国王（「酋」）の仕打ちに対して、フィラデルフィアで会議が開催されたことを記したこの記述中の「新大陸（「新地」）の旧制として…、その後に官が決定した」の一段は、『美理哥合省国志略』中で使用された「衿耆」の語を襲うにあたって、梁廷枏が特に補い説明を加えたものである。わざわざ「中国の故事にしたがって（沿中國故事）」と断っているところから、翻訳語としてたまたま選ばれたという以上の意図がこの「衿耆」の語に込められていることがわかる。

「新大陸（「新地」）の旧制として…」の一文に付された双行注、「「士子」には「進士」「挙人」の二種類があり、ともに「衿」という。この語については、後に詳しい」は、同じ巻二の次の記述を指している。ここでも省学〔館〕と大学館を修了した者たちが、中国の挙人・進士に擬えられている。

> 獲得・育成する人材はすべて「学館」の出身である。毎年、郷・県の学生を集めて試験を実施する。試験は一回を通例とする。合格者は「省学〔館〕」に入ることができる。合格しなかった者は郷に帰って学習し、明年ふたたび受験する。「省学〔館〕」の学習は四年を限度とし、満期修了した者は中国の「挙人」に擬え、「散館」を以って挙げられ、官となり師となることができる。あるいは各々その学習内容にしたがって士農工商となり、終生の生業とする。「大学館」は「省学〔館〕」の満期修了者のみが入学することができる。三年間学習したものは「進士」に擬えられる。〔すべて〕段階を追って上がり、必ずまず「郷学」から始める。[25]

アメリカ独立運動の際の指導層が、中国の地域リーダーである紳士（梁廷枏もその一員である）のイメージでとらえられ、フィラデルフィア会議に続く、『合省国説』の以下の建国の記事を、梁廷枏は非常なリアリティーをもって記述したもの

と思われる。梁廷枏のイメージする「衿耆」が、「立国の規条」を定め、任期のある大統領制を決定したのである。

ワシントンはただちに兵権を手放し郷里に帰った。時に戦塵が止んだ直後で、国事はまだ統制が取れていなかった。ほどなく〔乾隆〕五三年（西暦一七八八年）の春から首夏にかけて（按ずるに中国の一一月から一二月にかけて）、各省の「衿耆」がフィラデルフィアに集まって会議を行ない、まずワシントンを立てて臨時の全権統治を委ね、また全員で「立国の規条」を議定した。国に施行するものを「国例」といい、諸省に施行するものを「省例」といい、〔以下、順次〕「府例」、「州県例」、「司例」といった。議定後、〔「衿耆」たちは〕各自省に帰って報告を行ない、行き違いがないようにした。明年、〔「衿耆」たちは〕再度集まり、以後の常例がここに至ってようやく永遠に定められた。国に一人の大統領（「統領」）を置き、また一副大統領（「副統領」）を設けて輔佐をさせる。〔大統領には〕諸省のことを総理せしめ、四年経ったら別の人物を推挙しこれに代える。これを一期目として（大統領・副大統領ともに同じ）、もし人々が〔一期を終えた大統領に〕悦服し、別の人物を考えたくないという場合は、四年の再任を許す。〔しかし〕いかなる賢人も二期八年を越えることはできない。そこでワシントンを正式の初代大統領とした。[26]

巻二のこのアメリカ建国の記述に対応するのが、「合省国説」序文冒頭の一段である。[27] 六合の内外、中国から最果ての地に至るまで、一人の君主を戴いて賞罰禁令を統べない者はない。禅譲与奪の違いはあれども、君が上に治め民が下に従うというのは同じである。ところがアメリカ合衆国だけが異なる。「畏るべきは民に非ずや」という『書経』「大禹謨」の言葉が偽りでないことをこれで知るのである、と梁廷枏はいう。（一）建国の始めから、一国の賞罰禁令をすべて民が決議し、その後に人を選んでこれを守らせる。まず「国法」があり、その後に「統領」がくるのであり、その逆ではない。「法」というのは「民心の公」である。（二）「統領」は期限を切って代える。優れた「統領」であっても、そのために「法」を変えて任を続けさせることはしない。その地位にいすわり権力を恣にして退かないということはできないし、ど

のような形であれ「法」を犯して取って代わるということもできない。その進退はすべて「民」に公にされ、その上で「民」も自らの選んだ「統領」の命にしたがうのである。これは「郷挙里選」の意を持守し、確かな拠りどころがないと思われてきた、いわゆる「視聴、民よりす」ということを実証してみせたのである。このようにすれば、四年という限られた任期のある「統領」は、党を樹てることも私事を済すこともなく、「法」を遵守し、四年の間に全力を竭して、「民」に良い評判を残すよう心がけるだけである。(三) だが、このような「開闢より未だあらざるの局」は、「地」「時」「人」という、アメリカ合衆国にしかない三つの偶然の事情がそろって始めて可能であった。……

「合省国説」の目的は、アメリカ合衆国の民主制・大統領制を記述することにあるのではない。紳士としての自分を含む中国社会から敷衍した社会が、リーダーの公議によって、君主制を否定して独立し、法を体制の根幹に据え、指導者を選んで任期にしたがって取り代えたということ、すなわち『書経』「大禹謨」の「畏るべきは民に非ずや」、そして「郷挙里選」の意を持守し確かな拠りどころがないと思われてきた「視聴、民よりす」が、アメリカに及んで実証されたのだから、中国社会でも本来それが可能なはずだ(「夷の長技」は、もともと中国に備わっていたものが広がったのに相違なく、翻ってこれを己に求めればよい。第二章(a)参照)、と梁廷枏は主張しているのである。アメリカ合衆国にしかない三つの偶然の事情、という一文は後付の韜晦にすぎない。

(e) 梁廷枏のメッセージ

入城闘争の「勝利」というタイミングを見計らって、おそらく咸豊初年に同時に刊行されたと思われる『夷氛聞記』と『海国四説』は、緊密に呼応し完結した主張を行なっている。『夷氛聞記』は、アヘン戦争の本質は澳門から省城内へと向かう「互市」の外国人の空間的移動のプロセス、すなわち清朝政府によってしつらえられた「間」の消滅の問題であり、省城の紳士たちは自衛を期すと同時に、危機にさらされた天子のアイデンティティを守ったのだ、と述べている。一方、

『海国四説』は、この「間」が消滅したときに生ずる、紳士層と天子それぞれにとっての死活問題を、紳士層の側から論じている。『海国四説』は、「耶蘇教難入中国説」と「合省国説」（紳士のパート）、「蘭崙偶説」と「粤道貢国説」（天子のパート）がそれぞれペアを作り、外国人の省城ファクトリー常駐にともない活発化したキリスト教布教で危機にさらされている自分たちのアイデンティティー（「耶蘇教難入中国説」）が、ファクトリー外の土地租借などのために保護されない場合、貿易を国是として各地域で軍事的紛争を惹起しアヘン戦争を発動したイギリス（「蘭崙偶説」）の広州入城によって、徳を以って世界を「光被」するというアイデンティティーが揺らぐことになる天子（「粤道貢国説」）という存在そのものを、広州の紳士たちは否定するかもしれない（「合省国説」）、と示唆しているのである。

『夷氛聞記』巻五において詳述された、省城紳士のリーダーシップと地方大官の関与をめぐる梁廷枏の記述（第一章(b)）は、「事あるときは、まず彼ら（衿耆）を集めて公議させ、その後に官が決定した」『海国四説』「合省国説」巻二中の記述（第二章(d)）を念頭に置いているように思われる（梁廷枏の筆のもと、省城広州の紳士たちとアメリカ独立の「衿耆」は、二重写しになっている）。広州入城をねらうイギリス人から、実際に天子の「光被」の空間を守った省城広州の紳士たち（『夷氛聞記』巻五）は、同時に、君主制を否定して独立し、法を体制の根幹に据え、指導者を選び、任期にしたがってとりかえた「衿耆」（「合省国説」巻二）たる可能性を排除しないのである。事実、道光二七（一八四七）年二月二三日、すなわち耆英がデービスに二年後の広州入城を約した二日後に、「明倫堂公議」として孔子廟に貼られた次の掲帖（貼紙）中の「中国」「人民」が、素直に「皇帝」を上に戴いたものであるかどうかは、微妙な問題であるように思われるのである。

> 耆英が河南の珠江沿いおよび十三行近隣各街のすべての土地・店舗を、こっそりと逆夷（イギリス人）に割譲済みである、との話を耳にした。まだ告示が貼られていないので、真偽のほどは定かではないが、もしそれが本当であれば、威を失い国を辱しめること、これより甚しきものはない。もっともかくの如き奸臣が国を害ったとしても、それは皇帝自らが滅亡を招いたのであり、我ら人民と

は全くかかわりがなく、また取り合う必要もない。……もし（イギリス人が）占拠を強行すれば、我ら明倫堂に公議してともに義兵を挙げ、まず耆英を殺し、ついで英逆を討ち、以て公憤を晴らし国〔威？〕を伸べん。ここにあらかじめ全省に通達し、踴躍蜂起すれば、中国幸甚なり！人民幸甚なり！㉘

① 『海国四説』「海国四説序」四頁。ちなみに「（耆名を）「記」ではなく「説」としているのは」とあるのは、『海国四説』道光刊本と同時期に刊行された『合省国記』『英吉利国記』を念頭に置いているものと思われる。注⑦参照。

② 『夷氛聞記』一七二頁。

③ 正確にいえば、「何以異于昔人海圖之書、曰、彼皆以中土之人譚西洋、此則以西洋人譚西洋也」とある『海国図志』序文中の「以中土之人譚西洋」を、梁廷枏は「以中國人述外國」と言い換えたのである。

④ 清代中国知識人のこのような自己認識・世界観については、古典的文献として以下がある。全漢昇「清末的「西学源出中国」説」（『嶺南学報』第四巻第二期 一九三五年）。

⑤ 『籌辦夷務始末（咸豊朝）』（中華書局 一九七九年）第三冊一〇四九頁、一〇五一頁。兵部左侍郎王茂蔭のこの上奏中の「天から視た彼此の区分の無さ」の一段（一〇五一頁）は、それに先立って言及された「海外諸国の疆域形勢・風土人情をつぶさに掲載している」『海国図志』（一〇四九頁）を念頭に置いている。

⑥ 『海国四説』「海国四説序」三～四頁。『海国四説』には道光・咸豊二種類の刊本がある。各「説」序文の款識がたんに「広東澄海県訓導順徳梁廷枏」とあれば道光刊本、この前に「欽加内閣中書銜」が加えられていれば咸豊刊本である（『海国四説』「前言」四頁、前掲村尾進「梁廷枏と『海国四説』――魏源と『海国図志』を意識しながら」一六二頁）。京都大学附属図書館に収蔵されている『海国四説』、中国国家図書館に収蔵されている『海国四説』および「合省国説」「粤道貢国説」単行本はすべて道光刊本である。私は咸豊刊本を見ていないが、中華書局本『海国四説』は、四「説」がそろった咸豊刊本を元に、「合省国説」と「粤道貢国説」については道光刊本に差し替え、咸豊刊本との異同を注記したものであるから（すなわち「耶穌教難入中国説」咸豊刊本、「合省国説」道光刊本、「蘭崙偶説」咸豊刊本、「粤道貢国説」道光刊本）、実質的に咸豊刊本『海国四説』の体裁・内容をうかがうことができるテキストとなっている。

⑦ 梁廷枏に「合省国説」と「蘭崙偶説」をペアにする考えがなかった、といっているのではない。国立国会図書館に『英吉利国記』という不分巻五〇葉の梁廷枏の著作が所蔵されている。これは「蘭崙偶説」を、字句にはほとんど触れることなく、半分近くにまで削ぎ落として、イギリスの貿易・紛争を中心とする記述（中英間の貿易・紛争に関する事情を含む）に絞り込んだ、単純なダイジェスト版である。その序文には「道光二十有五年端六梁廷枏識」とあるから、これは道光刊本「蘭崙偶説」の序の「道光二十有五年端五」（前掲村尾進「梁廷枏と『海国四説』――魏源と『海国図志』を意識しながら」一六一頁）のわずか一日後である。「蘭崙偶説」の簡易バージョンともいうべきこの『英吉利国記』が、『合省国記』という名の書物とセットになっていたことが、この『英吉利国記』に書き込まれた「東軒逸人」という人物の識語（民国一一年夏）から知られる（村尾進「『海国四説』の意味」『東洋史研究』第五一巻第一号 一九九二年 七九頁、一〇三

頁・註三三）。したがって「蘭崙偶説」と「合省国説」をペアにするという考えが梁廷枏にあったことは確かである。問題は、それではなぜ「合省国説」と「蘭崙偶説」だけでは満足せず、さらに二「説」を前後に加える必要があったのか、どうして『英吉利国記』『合省国記』のセットと同時に『海国四説』を刊行する必要があったのか、すなわち四「説」全体として何をねらっていたのか、ということである。

⑧ 前掲村尾進「梁廷枏と『海国四説』――魏源と『海国図志』を意識しながら」一六一頁。

⑨ 『海国四説』一〇四頁・注①。

⑩ 『海国四説』一六四頁。

⑪ 『海国四説』四頁、五二頁。前掲村尾進「梁廷枏と『海国四説』――魏源と『海国図志』を意識しながら」一六一頁。

⑫ 『海国四説』一六四頁。

⑬ 『夷氛聞記』四頁。

⑭ 「蘭崙偶説」の核心が、貿易こそがイギリスという国家の生命、行動の基準であり、イギリスの貿易が世界諸地域における積年の紛争を惹起していることを示すところにあったことは、『英吉利国記』の序文（「蘭崙偶説」道光刊本の序文を、単純に削り込んだもの）に明瞭にうかがうことができる。注⑦、前掲村尾進「『海国四説』の意味」七九頁参照。

⑮ 『海国四説』一四一～一四六頁。

⑯ 『海国四説』一五一～一五三頁。

⑰ 『広州中路海防輯要』に関する以下の記述は、おおむね次の拙論を利用したものである。村尾進「東洋文庫蔵『広州中路海防輯要』をめぐって」（『中国文化研究』第二三号 二〇〇六年）。

⑱ 『（道光）広東通志』巻三三〇「外蕃」：「恭讀欽定四庫全書郝玉麟廣東通志提要、曰、新增外蕃一門、爲他志所罕見、然粤中番舶駢集、韓愈所謂東南際天地以萬數者、莫不瞻星戴斗、會極朝宗、裒而錄之、足見聖朝聲教之遠、亦通典述邊防而兼及海外諸國之例也、自容皇帝御極以來、海不揚波、梯航雲集、無遠弗屆矣、茲倣郝志之例、備錄外蕃諸傳、以供國史採擇」。

⑲ 「耶蘇教難入中国説」の主張に関する以下の記述は、「海国四説序」（一～四頁）・「耶蘇教難入中国説」序（一～四頁）・小見出し冒頭（四頁「總論彼教必將爲聖道所化、是作説之緣起」）、そして「論断」（四一～四六頁）に即して、まとめ直したものである。

⑳ 「合省国説」に関する以下の記述は、本論文の構想に合わせて、次の拙論から摘録し、まとめ直したものである。前掲村尾進「『海国四説』の意味」八七～九六頁。

㉑ 『海国四説』五二頁：「顧或者謂、西洋遠隔中夏、文制迥殊、今所稱省、稱府・州・縣、皆倣中國、彼十三省之肇次其目也、尚在入市受廛之先、於前代改道稱省之故、未有前聞、憑何循倣、緣是疑國人所自志者不盡足徵、然而熱爾瑪尼亞國之以合勒未祭亞爲省、皇朝職貢圖已載入焉、他若細亞州之有嘉略省、有弗俗府、歐羅巴州之有嘉亞省、利未亞洲厄日多國之有孟斐府、竝見南懷仁坤輿外紀、然則固不自其國始矣、又何不可信之有哉」。

㉒ 『海国四説』六四頁：「曰合省國者、知中國分省以治、故亦自稱其國內所分之地爲省、前分後合、從質卽以合省爲名」。

㉓ 『海国四説』六八頁：「凡繫名者十有三省、省各有城、人近百萬、分設總制官、曰督、曰撫、皆派於英吉利酋、各給印命之、俾得以國法治其衆」。

㉔ 『海国四説』七〇頁：「酋以民不遵約遷怒總制、遽欲收前所給印、所命官亦解體、新地舊俗、凡出自省學館（士子有進士・舉人、皆稱曰衿、語詳後）及老者、沿中國故事合稱衿耆、有事則先集其人於公、使會議而官定之、當乾隆三十九年（西洋諸國千七百七十四年）、諸省各以其

衿耆咸集費拉地費、會商止兵策」。

㉕『海国四説』七八頁：「所儲養人才、一出於學館、歳集鄉縣學生而考試之、試例止一場、取錄者得入省學、不與取者仍還其鄉肄業、俟明年再考、省學課習、限以四年、期滿視中国舉人、散館被舉可爲官爲師、或各隨所学、爲士農工商、皆令各終其業、大學館惟省學期滿者得與、肄習三年者視進士、以次而升、而必自鄉學始」。

㉖『海国四説』七二頁：「華盛頓隨解兵柄歸里、其時戰塵甫息、國事尚散無統紀、旋於五十三年（西洋諸國千七百八十八年）自春迄首夏（按即中國之十一月至十二月也）、集各省衿耆、會議於費拉地費、先起華盛頓隨宜權理、相與議定立國規條、行於國者曰國例、行於諸省者曰省例、曰府例、曰州縣例、曰司例、議訖、仍各還告其省、使無有參差、明年再集、而後常例至此乃永定焉、通國設一統領、又設一副統領爲之佐、使總理各省之事、週四年則別舉以代之、是爲一次（正副同）、其爲衆所悦服不欲別議者、得再留四年、雖賢不能逾八年兩次以外、就以華盛頓即眞爲初次統領」。

㉗『海国四説』五〇～五一頁。

㉘ 佐々木正哉編『鴉片戦争後の中英抗争 資料編稿』（近代中国研究委員会 一九六四年）二七九～二八〇頁「明倫堂公議」：「今聞耆英私將河南海邊及附近十三行各街土地舖戸、均已割與逆夷、惟其未貼告示、不知眞否、如果屬實、失威辱國、莫此爲甚、但此等奸臣害國、乃皇帝自取其亡、與我百姓全無干涉、不必理及、……倘或強行覇佔、我等公議明倫堂、同舉義兵、先殺耆英、後剿英逆、以洩公憤、以申國〔威？〕、茲預怖聞、俾闔省均知、踴躍舉事、中國幸甚、人民幸甚、丁未年二月廿三日」。

おわりに

入城闘争「勝利」後の咸豊初年に『夷氛聞記』と『海国四説』を読む――このことはアヘン戦争の再解釈を読者に迫るとともに、アロー戦争への視点をも準備することを意味していた。アロー戦争のプロセスと中国側の意味付けは、「入城」「駐京」「覲見」という三つのキーワードでまとめることができる。[1] 入城問題の「勝利」は、葉名琛に対する咸豊帝の信頼と重用、交渉の唯一のチャネルとしての広東欽差大臣という結果をもたらし、条約改正にかこつけたイギリス側のあらたな広州入城の要求を、葉名琛が拒否し続けたことからアロー戦争が勃発した。北上した英仏連合軍との第一次天津戦役と四ヶ国天津条約、および上海における税則会議の交渉は、外国使節の北京常駐をいかにして阻止するか、という問題を核心としていた。その後、批准書交換を目的に再北上した英仏連合軍との第二次天津戦役後、北京に進軍する連合軍に押し込まれながら断続的に行なわれた交渉は、外国使節が国書を天子に直接手渡すのをいかにして回避するか、を焦点とし

ていた。清朝中央がこの三つの問題に執拗にこだわったのは、省城広州（「入城」）から北京城（「駐京」）、そして天子の身体そのもの（「覲見」）へと向かう「互市」の外国人の空間的移動が、「朝貢」の一連のプロセスとプロトコールを破壊し、徳の「光被」という天子のアイデンティティーを損なうからであった。

咸豊帝の天子としての資格に対する厳しい視線は、天津条約が締結された直後に上呈された兵部左侍郎王茂蔭の奏摺に端的に表現されている。海外諸国が日々覇を競い、人から見れば中外の区分があるも、天から見れば彼此の区別はほとんどない、現在のフラットな世界において、列聖の付託の重きを承け中国の主となった天子が四夷を賓服させるには、いっそう「昭明の徳」を盛んにして根本を固める必要がある、と王茂蔭が咸豊帝に迫ったのは、裏返せば、外国使節の北京常駐承認という異常事態を念頭に、徳の「光被」が遮られてしまった天子に存在意義は一体あるのかという、梁廷枏と全く同質の問いかけ〔省城入城と北京入城というレベルの差はあるものの〕を行なったものである。[2]

一方、アロー戦争と同時期に展開していた国内の民衆叛乱は、天子をめぐる清朝中央の危機感を、さらに別の角度から増幅させた。葉名琛が入城の要求を拒否し続けていた咸豊四（一八五四）年、広州府内に蔓延していた天地会叛乱の指導者は、「華夷の辨」をいい立て、天命を享けず人心を失っている「夷虜」に代わって、天命を享けた漢人の天子が到来していると声高に標榜していたが、[3]これに対しては、二百年来、清朝の皇帝が天子たるにふさわしい大徳を失ったことはない、という反駁も見られた。[4]しかし、華南全域に展開した太平天国の東王楊秀清の著名なマニフェスト「奉天討胡の檄」――そこには「天下は中国・上帝の天下であり、胡虜の天下ではない」「中国は神州であり、胡虜は妖人である」など、「華夷の辨」が激しく唱えられている――に対して、こちらも反太平天国のマニフェストとして、おとらず有名な曾国藩の「粤匪を討つの檄」では、すでに清朝の危機よりも、「耶蘇・新約の書」がもたらした開闢以来の名教の危機の方に、主張の重点が移ってしまっているのである。

アロー戦争の全プロセスの核心が、このような漢人に顔を向けた、満人の天子の徳の「光被」の問題にあった（「はじめ

に」註⑪参照）ことは、上海税則会議の際のエルギンあての照会文で、いったんは認めた外国使節の北京常駐の取り消しを桂良がおずおずと持ち出し、「外国使節の北京常駐は、中国にとって言語に絶するほどの諸々の痛手をもたらすことになる。要は、現在の危機的かつ困難なわが国の状況（太平天国などの民衆叛乱を指す）において、これは政府に対する人民の敬意の失墜をもたらすにちがいないということである。これがどれほどの災難であるかは、貴殿に喋喋として述べ立てるまでもないことであろう。」と述べていることから、いっそう明らかである。[5]

移動という視点から見た時、一八〇〇年前後から一八六〇年までの半世紀あまり（マカートニー・アマースト両使節団派遣・二度の澳門占領事件から北京条約まで）は、澳門から省城広州、省城広州から北京城、天子の身体へ、という「互市」の外国人の空間的移動と、それにともなう清朝天子のアイデンティティの危機のプロセスとして把握することができる。アヘン戦争とアロー戦争は、同質かつ連続した一連の出来事にほかならず、さらに太平天国運動を含めた三者は、いずれも天子のアイデンティティを問題としていたのである。このように考えた時、「入城」「駐京」「覲見」に続く、咸豊帝の「蒙塵」と西太后の「垂簾聴政」が、ともに「覲見」を回避することを目的としていたのではないのかということ、とりわけ後者について、西太后が実権を握ったということよりも、天子を「不在」とすることで「覲見」自体を不可能とすることに本来の目的があったのではないかということは、一度検討する余地があるように思えるのである。

① この三点に沿ってアロー戦争を論じた研究としては、矢野仁一『アロー戦争と円明園――支那外交史とイギリス その二』（中央公論社 一九九〇年）と茅海建『近代的尺度――両次鴉片戦争軍事与外交』（上海三聯出版社 一九九八年）がある。

② 『籌辦夷務始末（咸豊朝）』第三冊一〇五一頁。王茂蔭は梁廷枏と同様、アロー戦争時期の最重要問題は「〔北京〕進城」「伝教」の二事であると認識していた。『籌辦夷務始末（咸豊朝）』第三冊八四二頁。また、本論文第二章・注⑤参照。

③ 佐々木正哉編『清末の秘密結社 資料編』（近代中国研究員会 一九六七年）二八頁「天地会告示」。

④ 同上一〇八頁「討三合会匪檄」。

⑤ *Correspondence relative to the Earl of Elgin's Special Missions to China and Japan, 1857-1859, Presented to the House of Lords by Command of Her Majesty*, London, 1859, p.411.

pilgrims and then to unify the result with the analysis and the results of Newett's research, so that we can approach a comprehensive understanding of the changes in the system of the galleys for pilgrimage and their patrons.

Reading the *Yifen wenji* and the *Haiguo sishuo* in the Early Years of the Reign of Xianfeng: The Significance of the Migration of Westerners from Macao to Guangzhou after the Treaty of Nanjing

by

MURAO Susumu

Liang Tingnan 梁廷枏, who was an influential leader of society in the Guangzhou region during the latter half of the nineteenth century, published two works, *Yifen wenji* 夷氛聞記 (*Report on the Alien's Situations*) and *Haiguo sishuo* 海国四説 (*Four Discourses on Overseas Countries*), during the early years of the reign of Xianfeng (in the beginning of the 1850s) that were timed to the Chinese success of the refusal to allow the British to enter the city of Guangzhou. With the intent of criticizing the famed *Yisou zhengfuji* 夷艘征撫記 (*Conquest and Submission of the Alien Fleets*) and *Haiguo tuzhi* 海国図志 (*Illustrated Description on Overseas Countries*) of Wei Yuan 魏源, he presented a consistent argument in *Yifen wenji* and *Haiguo sishuo*. *Yifen wenji* argued the essence of the Opium War was the process of the spatial movement of foreign traders from Macao to Guangzhou, in other words, the elimination of the Qing government policy of keeping distance between Guangzhou and Macao. On the other hand, *Haiguo sishuo* argued the fatal issues facing the literati class 紳士層 and the son of heaven 天子, which would be caused by this elimination of this distance, from the perspective of the literati.

Haiguo sishuo was composed of two paired sections: one is "Yesujiao nanru Zhongguo shuo" 耶蘇教難入中国説 ("Why the Christianity Cannot Enter China?") and "Heshengguo shuo" 合省国説 ("On the United States") as the section of the literati, and the other is "Lan Lun oushuo" 蘭崙偶説 ("On the United Kingdom" and "Yuedao gongguo shuo" 粤道貢国説 ("On the

Tributary States via the Guangzhou Route") as the section of the Emperor. He pointed out that their own identity as Chinese literati was threatened by Christian proselytizing that accompanied the long-term residence of the foreigners in the Canton factory after the Opium War (as discussed in "Yesujiao nanru Zhongguo shuo"), and if their own identity would not be protected due to the lease of land outside the factory, and the English, who invited military conflicts throughout the world by reason of trade as a national policy and instigated the Opium War (as discussed in "Lan Lun oushuo"), would enter the city of Guangzhou, that might cause the right reason for the existence of the son of heaven, as a figure spreading virtue over the world, to be shaken (as discussed in "Yuedao gongguo shuo") and to be denied by the literati of Guangzhou (as discussed in "Heshengguo shuo").

Liang Tingnan's perspective was nothing other than to indicate that the spatial movement of the foreigners in the Opium War and the succeeding Arrow War, namely the movement from Macao to Guangzhou (the entry of foreign consuls into the city of Guangzhou), from Guangzhou to Beijing (stationing of foreign ambassadors in Beijing), and from Beijing to the body of the son of heaven (imperial audiences with foreign ambassadors), was a continuous process of the same character: plainly speaking, the violation of "tribute" 朝貢 by "trade" 互市, which meant the crisis of identity of the son of heaven.

The Conscription Crises in Canada during the First and Second World Wars: The Experience of Total War and Cultural Minorities

by

TSUDA Hiroshi

Canada is known as the first country to officially adopt multiculturalism as its national policy. This essay aims to explore an aspect of the origin of Canadian multiculturalism by tracing the debate on military conscription during the First and Second World Wars.

Canada mobilized 630,000 soldiers during the First World War (out of the total population of 8 million) and 720,000 soldiers during the Second World